



右/配水池の施工現場で段取りを確認、指示する飯田。
左/ものづくりコンテストに参加したときの記念写真。

すぐにも現場で働きたい

「中学生のときには、建設現場で仕事をして
いる姿をイメージしていました。橋がどんな構
造になっているのか気になり、よく下から見上
げている土木好きだったんです」
飯田は岩田地崎建設㈱に入社して今年で九年
目。中学時代に土木のスケール感、インフラ整備
が生活に与える影響の大きさに惹かれたという。
「父がサービス業、母が幼稚園教諭だったこ
ともあり、人の役に立つ仕事」を意識していま
した。小学生のときに横浜ベイブリッジを見て、
この橋のように一〇人より一〇〇人、一〇〇人
より一万人の役に立つ仕事がしたいと思っ
たんです。外で体を動かすことも好きだった
ので現場監督として現場で働きたくなりまし
た」

「高校時代の一番の思い出は、全国工業高等
学が学べる工業高校へ進学した。」

学校長協会主催のものづくりコンテストに参加
して、橋梁模型制作部門で模型のデザイン性や
耐久性を競ったことです。一定の加重を規定時
間以上支えられれば、耐久性は合格となります
が、私はあえて時間ちょうどまで耐える強度を
狙ったんです。計算通りに壊れる美学ですね
(笑)。丈夫につくるより難しく、試行錯誤を重
ねて本番に臨みました」
土木工学の理論を学び、自分の手でカタチづ
くる。その結果を考慮し、さらに工夫する。工
業高校での貴重な体験が現場監督への想いを強
くしていった。
「就職活動をはじめた二〇〇五年頃は、女子
高生を現場に採用する企業はほとんどありませ
んでした。そのうちようど就職氷河期といわ
れた時期で、公務員試験も受けましたが、そち
らは最終面接で不採用。採用された男子学生に
『もし飯田が男だったら多分、俺が落ちていた』
と言われてものすごくショックを受けました。
男女の壁を痛感して悔しかったです」
女性が現場で働くことがまだ稀な時代ではあ
ったが、飯田は現場監督になることを決して諦
めはしなかった。
「どうしても現場監督になりたかったので、
高校の恩師に言われた『志ある者事遂に成る』
という言葉に胸に大学進学を選びました。現場
で役に立ちそうなことは色々知っておきたかつ
たので、必修単位以上の講義を受けました」

輝け! けんせつ小町 土木技術者

飯田百合亜
岩田地崎建設㈱ 技術部技術課



「けんせつ小町」は、
日建連が定めた建設業で
活躍する女性の愛称です。



my Beginning

私が建設業界に入った理由

たくさんの人の役に立てる天職

my style

スイーツ巡りをすることが好きなんです。休日は夫を連れてカフェやお菓子屋さんを回ったりもします。桜の花が好きということもあって、桜の時期になると出てくる桜スイーツには目が離せません。桜どら焼き、桜シフォンケーキ、桜ラテなど桜が付くものを見つけたらとりあえず食べていました(笑)。桜と甘いものは、私にとって最高の組み合わせです。食べているときは至福のひとつですね。



「今日は桜もなかを買ってきました。休み時には他の部署の女性と一緒に食べることもあります」



右/オフィスの本棚には土木分野の文献がびっしりと並んでいる。
上/技術部の皆さん。飯田の右隣が河村部長。(1名出張中)
下/支援業務のひとつ。現場の3Dモデルで地層を分析する。



my Growing

私が建設業界で学んだこと

自分の役割と価値を確立する

現場で働くことだけを考えて勉学に励んでいた飯田は、就職活動の面接で「現場で仕事ができないなら採用していただかなくて結構です」と必死に想いを伝えた。飯田の熱意に応える企業は複数あったが、地元である北海道に本社を構える岩田地崎建設(株)に二〇〇九年に入社する。数々の壁を乗り越え念願の現場監督となった。

現場で学んだ誇りと責任

「橋脚や配水池など私が携わった構造物は、難しい工事が多く一筋縄ではいきませんでした。でも、日々完成に近づく現場や竣工して大勢の人が利用している様子を見ると、役に立てた実感が湧いて胸が熱くなります」

現場で働く毎日が楽しく、あつという間に月日が経つたと語る飯田だが、仕事をするうえで心掛けていることがあるという。

「土木技術者の仕事は人々の暮らしと安全を守り社会を支えることです。大きなものをつくらなければならない、それは小さな作業の積み重ね。一つひとつの作業はミリ単位の緻密さが必要で全く気が抜けません。ひとりよがりや自己満足にならないよう、周囲に耳を傾けることを意識しています」

人々の生活を支える仕事には、そこを利用する人々の命に関わる責任が伴う。飯田は現場のものづくりの楽しさと同時に、様々な部署やたかさんの職人と協力することの大切さを学んだ。

根幹は変わらない

二〇一四年、現場監督として活躍していた飯田に本社技術部への異動の話が持ち上がる。

「入社二年目で結婚したんですが、結婚後内勤という考えはなく、夫の支えもあって現場所長を目標に働いていました。異動の話をしていただいたときは仕事や結婚生活にも慣れてきた頃で、これからの働き方についてあらためて考え始めていました。これも何かの縁と思い技術部へいくことにしました」

現場での仕事は充実していたが今後のワークライフバランスを考え、技術部への異動を決意した。技術部での仕事はどのようなものなのか。

「技術部は土質、コンクリートといったそれぞれの専門分野のスペシャリストの集まりとも言われています。全国にある施工現場に対して問題解決のための提案やサポートをしている部署です。現場にいた頃と業務内容は違えど、人々の生活を支える仕事という根幹は変わらないのでやりがいはいくらでもあります。現場にいたときはできなかった社外の委員会活動や建設業の広報活動を兼ねた関連イベントにも参加していますが、今後の建設業の在り方や女性の働き方について話し合うことに普段の業務とは違った充実感を感じます」

国土交通省や札幌市が主催するイベントで講師を務めたり、北海道内ではまだ少数の女性技



「飯田は段取りがよく先を読んで行動するので、ざっくりとした指示でもきちんと整理してまとめてくれる頼もしい存在ですね」(河村部長)

profile



いいだ・ゆりあ ●1986(昭和61)年、神奈川県生まれ。小学校から両親の出身である北海道に移り、工業高等学校土木科に進学。大学では社会基盤工学科を専攻し、2009(平成21)年、岩田地崎建設株式会社に入社。橋脚造成工事をはじめとする数々の現場に携わり、2014(平成26)年7月に技術部へ異動し、広報活動などにも積極的に参加している。日建連の第2回「けんせつ小町活躍推進表彰」優秀賞を受賞した。

術者をまとめたチーム「建設どさん娘の会」を立ち上げるなど、建設業への理解促進や女性技術者同士の交流の場づくりにも尽力している。

「私にも産休、育休をとるときが必ずきますが、そのとき、会社にとって私の存在価値がないとどうなるのか不安になります。なので、技術部の仕事だけでなく、私にしかできないことを日々模索しながら精進しています。最終的な目標は定年を迎える日まで無事に勤めあげること。そして退職後は、現場に差し入れを持つていくおばあちゃんになることなんです(笑)」

逆境に挫けず現場監督になるという夢を実現させた飯田。働く場所が変わっても、その根幹にある「人の役に立つ仕事」をしたいという想いはこれからもぶれることはない。志を高く持ち、自分なりの働き方を探しながら飯田は力強く前へと進んでいる。

my **Growing** 私が建設業界で学んだこと